

別冊

おいしいだものがたり

～資料館資料編～ ■「没後70年 大石田の齋藤茂吉とその周辺」より

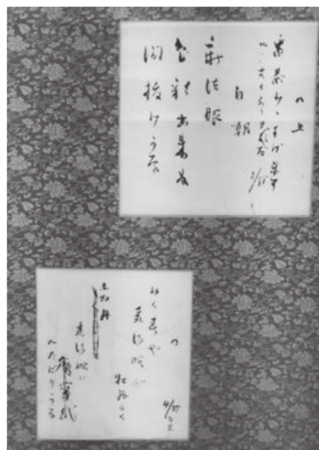
資料館で開催中の「没後70年 大石田の齋藤茂吉とその周辺」では、齋藤茂吉が大石田在住時に詠んだ短歌やその頃の茂吉を支えた弟子たちの作品など、直筆の墨書を中心に展示しています。そのほかにも、大石田時代の茂吉はこの期間のみ本格的な日本画の制作を行っており、その絵画作品などもご覧になれます。その中から今回は齋藤茂吉『戯句三句』をご紹介します。

これは「新法眼色彩出来ぬ間抜けかな」「ゆく春や禿法眼が牡丹かく」「赤牡丹禿法眼のへたばりかな」という三句の戯句からなる軸で、戯句とは戯れにふざけて作った句のことをいいます。また「法眼」はもともと僧位の一つでしたが、中世以降僧職以外の者にも与えられるようになり、絵師としては狩野永徳や狩野探幽といった天才たちが名乗ったこともありました。つまり絵画においては素人であるにも関わらず自分自身を「法眼」レベルの大画伯であるといっているのですが、その後に続く彩色がうまくいかない間抜けだなあ、という自虐との落差が可笑しみです。

二句目の「ゆく春や」は芭蕉の「行く春や鳥啼き魚の目は泪」からでしょうか。「禿」は「トク」と読み、親鸞が非僧非俗の身を表すのに用いた姓としても知られます。ただしこの場合は単に「頭部に毛髪が無い状態」のこと。時に茂吉65歳。「過ぎて行く春の日にお爺さんが牡丹の花を描いているよ」というほのぼのとした光景が目に浮びます。

これらの戯句には（昭和22年）6月3日と4日の表記があり、実際この頃の日記には「牡丹開ク」「白牡丹ヲツ畫イタ」「牡丹ヲ畫イタ、タニ至ツタ」「牡丹ヲ寫生シタ」「淡紅ノ牡丹ヲ剪り、寫生」「午前中、牡丹圖、出来ハナハダワルシ」「牡丹シクジル」「牡丹ヲ畫ク、出来オモシロカラズ」（5/30～6/6）などと記してあり、牡丹を描くことに執心かつ腐心している様子がみえます。そして最終的には疲れ果てて「へたば」ってしまうのです。

これらの三句からは、茂吉はへとへとになるくらいに集中して絵を描き、そしてそれがなかなか上手いかないことも含めて、その時間を楽しんでいたことがうかがえます。息子である茂太氏や宗吉（北杜夫）氏らの茂吉評をみると、家では全く冗談を口にしない堅物といった印象があることから、このような戯句自体が茂吉の性格上とても珍しいものだといえるのです。



「没後70年 大石田の齋藤茂吉とその周辺」は8月27日(日)まで



◇編集・発行 大石田町総務課

〒999-4112

山形県北村山郡大石田町緑町1番地

0237-35-2111

FAX 0237-35-2118

◇印刷／大場印刷株式会社
広報おおいだの文字書体は誰にでも読みやすいユニバーサル書体を使用しています。

大石田町公式アカウント開設

LINEはじめました

防災情報などを
受け取ることができます。

友だち登録を
お願いします！

登録方法

右の二次元コードを読み
取って友だちに追加して
ください。



大石田町公式LINE

防災放送の内容を

電話で確認できます

防災放送が聞き取りにくい、放送内容を確認したい等のご意見をいただき、町では防災放送確認ダイヤルサービスを開始しました。

このダイヤルは定時(夕方6時のメロディ等)放送を含め、直近の放送から8時間以内の内容を順次聞くことができます。

確認ダイヤル：0237-48-8444

■総務課総務グループ TEL.35-2111 (内線218)

町の人口 令和5年7月1日現在

世帯数	2,244戸	(-2)
総人口	6,205人	(-12)
男	3,079人	(-7)
女	3,126人	(-5)

(6月中の異動)

出生	0人	転入	7人
死亡	4人	転出	15人

※この人数は外国人も含めたものです。